

標高が少し高くなると馬鈴薯が作られている。この省は面積が広いので、馬鈴薯の作付け面積も中国一位であるが、今回は馬鈴薯の産地まで行けなかった。上海は早くから日本と関係の深い町で、今回見学した工場も日本との合弁企業であった。

この様に、北京市のほか克山県、成都市、

上海市の3か所を訪れたが、地域が広大で移動に時間を要し、おのずと聞き取りや調査の時間が限られた。したがって、技術交流に資するほどの十分な情報は得ることはできなかったと考えているが、得られた情報を基に、これまでの知見を加えて報告書の責めを果たしたい。

II 交流の目的

中国は甘薯については世界最大で、馬鈴薯も旧ソ連に次いで世界第二の生産国である。そして、近年の円高等を背景に、特に甘薯については我が国への輸入が急増しており、馬鈴薯については膨大な需要を背景に諸外国の進出が伝えられている。そして、中国の改革開放政策は中国人の目を外国に向けさせる結果となり、生活水準の向上は食生活の内容も

変化させようとしている。

一方、わが国の薯類はガットUR農業合意に伴って非常に苦しい立場にたたされ、円高はアメリカからの馬鈴薯加工品の輸入を急増させている。

このような観点から、日中の薯類の専門家による技術交流を進めることで、双方の国での新たな技術と事業展開の資料とする。

III 交流団の構成および日程

1. 団の構成

(氏名) (所 属)

団長	知識 敬道	カルビー・ポテト(株)顧問
団員	秋元 喜弘	(財)いも類振興会専務理事
	井上 浩	川越サツマイモ資料館長
	斉藤 興平	(株)川小商店代表取締役
	酒井 司	長崎県種馬鈴薯協会事務局長
	吉永 一浩	日本澱粉工業(株)開発研究部主務
	大山 効輔	亜細亜農業技術交流協会嘱託通訳

2. 日程と訪問先 (1995年)

10月2日	成田発(14:55) 北京着(18:00) 亮馬河大厦泊
10月3日	国慶節後の休日のため、北京近郊の見学及び自由市場の視察
10月4日	午前 中国農業部表敬訪問及び聞き取り 午後 国際馬鈴薯中心北京駐在員事務所訪問
10月5日	北京発(11:30) 途中瀋陽に一時着陸ハルビン着15:30となる 黒竜江省農牧漁業庁訪問 綏芬河大酒家泊